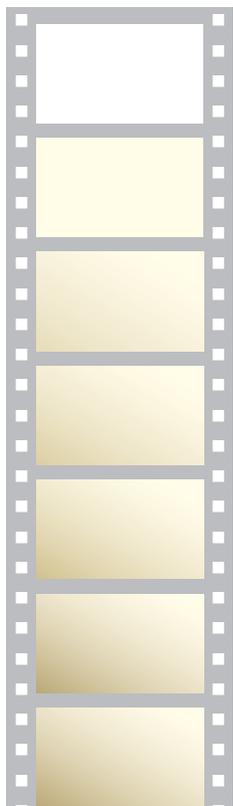
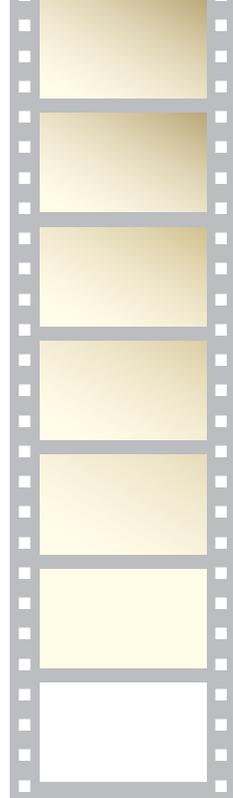


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第六十八回 「暗黒のなかに運命の力」

ぼくの大学4年、夏（昭和44年）は「アッ！」と言う間に目の前を通り過ぎていきました。試験日を各社が申し合わせたかのように、6月と7月に集中して実施したのです。そして秋になると、全く「アナウンサー採用試験」は、潮が引いたようありませんでした。

『アナウンサーへの道は遠い』。「もしかしたら就職浪人も考えなければならぬ」と、暗く考えるようにもなりました。そんなぼくの心の支えになつてくれたのは、元T局のアナウンサーで、脱サラ後、アクセサリー店を経営するKさんでした。

「伸ちゃんなら大丈夫。全国には100以上の放送局があるから、頑張ればどこか通るよ。あきらめないで続けてごらんよ」と慰めてくれるのでした。

「心の支え」になつたものがもう一つあります。アメリカのテレビ映画「逃亡者」のオープニングナレーションです。（詳細は第6回・第7回をご覧ください）妻殺しの

罪で死刑を宣告された男が、列車事故をきっかけに全米を逃げ回る120回のテレビドラマシリーズ「逃亡者」。

そのオープニングナレーション（日本語版は矢島正明）の一節は、

「しかし、その暗黒のなかに、運命の計り知れぬ力が潜んでいたのだ」でした。

ナレーションは毎回、少しずつコメントに変化があり、その部分を見つけるのが楽しみでした。なかでも「暗黒のなかの運命の力」。この言葉は弱気になったぼくの心に、光明をもたらしてくれるかのようにでした。

高校時代から親しくしていたN君（故人）とS君（故人）は、はやばやと就職が決まりました。N君は広告代理店へ、S君は地元の銀行へでした。親しい友人で決まっていないのは、ぼくだけでした。それでも二人は気を遣って、

「伸夫チャンの就職が決まったら、三人で温泉へ行って就職祝いをしようよ」と言ってくれたのです。

お膳立ては整っているのに、ぼくの就職先が決まらないので、二人の親友は「来

年は、塩釜神社へ元朝参りに行くのか？」と誘ってくれたのです。

(続)

文中敬称略

伸

平成25年8月